

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12240

研究課題名（和文）仏教説話図の図像学的研究—アヴァダーナを中心として—

研究課題名（英文）Study on Buddhist narrative paintings

研究代表者

大羽 恵美（Oba, Emi）

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：50707685

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：仏教説話図は仏教美術誕生の頃から仏教の教えを伝える手段として、あるいは寺院などの荘厳として用いられてきた。そのうちのたとえ話の集成で、11世紀にカシミールで編纂された『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』を邦訳し、これを典拠とした絵画作品の同定を行った。邦訳は科学研究費成果報告書『菩薩伝の如意の華鬘』（共著）に、絵画の同定と論考は書籍『チベットにおける仏教説話図の研究』に発表されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仏教説話図の誕生は古く、国内外において研究があるが、たとえ話に関してはその数が膨大であり、様々な内容を含むために研究が遅れている。本研究の中心をなす文献の『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』はこれまでに完全な形で翻訳されたことはなく、これに依拠した絵画作品の同定もなされていなかった。本研究では全108章あるうちの一部の翻訳と絵画作品の同定を行った。さらに複数ある絵画セットの所在と所蔵地、系統を明らかにした。世界各地にセットの断片が散逸し、典拠があいまいになっている絵画について、いずれの絵画セットに属するか、成立年、施主、絵画様式を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research investigates the Buddhist narrative paintings with a main focus on the Boddhisattva-avadana-kalpalata, dPag bsam 'khri shing in Tibetan. The result of this study is clearer identification of the paintings based on Boddhisattva-avadana-kalpalata in relation to some textual descriptions from the Vinaya, and to the paintings of other narratives. Translations from Bodhisattva-avadana-kalpalata in Sanskrit and dPag bsam 'khri shing in Tibetan into Japanese have been done and published. The result of survey of the paintings with lists of the titles and tables of chapters in each painting, as well as identification of the figural presentation in the paintings have been published.

研究分野：仏教美術

キーワード：仏教説話 アヴァダーナ チベット美術 ジャータカ 仏教説話図 チベット仏教

## 1. 研究開始当初の背景

仏教説話図の典拠の一つとなる比喩譚(たとえ話、サンスクリット語で「アヴァダーナ」とは、釈尊や弟子、あるいは信者や王などの前世の行いと今生の結果の接合を示し、因果応報を説く物語の集成である。物語の主要な場面を単独で、あるいは連続で複数場面にわたって、絵画や浮彫などに表したものが仏教説話図で、仏教美術誕生の地であるインドからわが国に至るまで多くの作例が残されている。本研究では比喩譚のうち、『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』(邦題で『菩薩の偉業物語の華鬘』、以下『カルパラター』とする)を中心に取りあげる。

『カルパラター』は11世紀にカシミールで編纂された比喩譚の集成で、サンスクリット語で書かれたが、後にチベット語に翻訳され大変な人気を博す。これに伴って『カルパラター』を典拠として版画や軸装絵画、壁画などが表され、それらはチベット本土やインドおよびネパールに流布しただけでなく、中国・北京市内の寺院および故宫博物院の所蔵品の中にもあり、多くの優れた作例が見出される。また、断片的に海外の所蔵となっている作例も多くあるが、それらの多くは典拠の同定がされていない。『カルパラター』の研究は文献学的、および美術史的研究においても著しく遅れている。絵図の同定に欠かせないサンスクリット語原典の全訳がチベット語訳以外なく、英語訳の梗概があるのみで、文献そのものの研究がほとんどなされなかったからである。

その中で最近の傾向として、『カルパラター』の翻訳が日本の研究者を中心に進められており、この分野の研究の先駆けとなっている。筆者も本研究課題の開始前から共同で翻訳を行い、それを典拠とする絵図の同定を発表してきた。美術史における研究では、イタリアの Giuseppe Tucci が著書(Tibetan Painted Scrolls, 1949年)で『カルパラター』のすべてのあらすじと一種類の絵画のセットを紹介しており、比喩譚をふくめた仏教説話図の研究に画期的な成果を残している。しかし、その発表以降の研究は国内外を問わずほとんどない。日本の研究者による翻訳についても、絵画作例の同定まで対象を広げる研究は筆者の研究の他は皆無であった。

## 2. 研究の目的

インドにおける『カルパラター』を典拠とする美術作品は、これまでのところ発見されていない。周辺の地域であるネパールやチベットへ流布した後の文学的影響力は相当に大きく、また、芸術作品においても大量に複製された版画が広く流布し、当該地の仏教教化に大きな役割を果たしている。これにもかかわらず先行研究が乏しいため、まずは基礎的な資料を整えることを目指す。具体的には、文献を精訳し、原典に基づいて絵図の解析や物語の場面同定を精確に行うことである。さらに、所収されているそれぞれの物語の主題や材源を検討し、流布と展開の一端を明らかにすることを目指す。『カルパラター』は説話文学においては比較的后期に成立し、南アジア(インド・チベット・ネパール)の比喩譚の集成として分析するのに至適な分析材料である。本文の解明は他の比喩譚や説話図の解明につながるようになるだろう。

## 3. 研究の方法

### (1) 『カルパラター』の翻訳・絵図解析(未翻訳の章の邦訳と絵図の同定)

翻訳し絵図解析とともに発表したのは以下となる。

(章番号はすべてサンスクリット語訳に準ずる)

第22章「ヴィシュヴァンタラ物語」、第26章「釈迦族の物語」、第27章「シュローナコーティヴィンシャの物語」、第28章「酔象物語(ダナパーラのアヴァダーナ)」、第29章「カーシースンダラの物語」、第30章「スヴァルナパールシュヴァの物語(黄金の鹿物語)」、第31章「カリヤーナカーリンの物語」、第32章「ヴィシャーカの物語」、第33章「ナンダ・ウパナンダ竜王の物語」、第34章「スタッタ長者の物語」、第35章「ゴーシラの物語」、第36章「プールの物語」、第37章「ムーカパンダの物語」、第38章「クシャーンティの物語(忍辱仙人の物語)」、第39章「カピラの物語」

このうち、第27章から第38章において説かれる物語については科研費成果報告書として共著で発表した。

以上のすべての絵図の同定は単著で書籍に発表した。

### (2) 『カルパラター』や関連する説話の分析

『カルパラター』と同じ主題を持つ物語は律文献や経典などの他のジャンルの文献にも存在する。このような文献に基づく美術作品を収集し、『カルパラター』と比較することによって、文献中や絵画におけるイメージの源が明らかになった。『カルパラター』は比喩の物語の集成であるため、一貫して依拠した文献があることは想定されなかったが、おおむね、根本説一切有部の律文献と同様の表現や物語の展開を見ることができた。

### (3) 比喩譚を典拠とする美術作品の現地調査

現地調査はインドにおいてはニューデリー（チベットハウス博物館所蔵の絵画セット）とダラムサラ（チベット博物館所蔵の絵画）、中国・北京市内（雍和宮および故宮所蔵の絵画セット）で現物を確認し調査を行った。これにより、当該の絵画における細部や様式、および銘文を確認することができた。

#### （４） 文献資料と画像資料データベース化・分析

収集された文献資料と画像資料は全てデータベース化し、分析した。現地調査したすべての絵画セットの内訳とリスト、絵画セットの中の物語の配置図、章番号と絵画の対応表、チベット語とサンスクリット語のタイトル対応表、チベット語とサンスクリット語の固有名詞対応表はすべて発表した書籍の中に所収されている。

### 4. 研究成果

本研究課題の成果は以下の通りである。

#### (1) ジャータカ・仏伝図・アヴァダーナに基づく説話図における各テーマについて

##### ① 「ヴィシュヴァンタラの物語」

「ヴィシュヴァンタラの物語」はインドのみならず、アジアの広い地域から作例が看取され、先行する研究が豊富にあるが、チベットにおける研究はなかったため、チベットにおける特質を明確にした。基本的に典拠となる文献に基づいて絵画化されているが、同じテーマを説く他の文献も参照されていたことは明らかで、文献の具体的な記述に乏しい場合は、他文献の記述に沿っていることが明らかとなった。絵画の表現を分析すると、物語を説く文献だけでなく、根本説一切有部の諸律からの援用があった。

##### ② 「舎衛城の神変物語」

「舎衛城の神変物語」はインドの作品の研究があるために、従来のチベットの絵画作例の研究ではこれを応用して解釈された。つまり、「舎衛城の神変物語」を表すチベットの絵画においては従来、釈尊の背後に表される小さな「化仏」が千仏化現であると解釈された。しかしこれらは『賢愚経』に説かれる14日分の神変の内容を表すことを明らかにした。また、「舎衛城の神変物語」が、インドにおいて、千仏化現や双神変に見られる釈尊が示した偉大なる奇跡をテーマとするのに対して、チベットの作品の場合は金剛手による異教徒の降伏を主眼とすることも明らかにした。

「舎衛城の神変物語」はチベットにおいて非常に重要な事績で、年中行事である祭典ともなっている。この祭典を説く文献には『賢愚経』を典拠とする記述が散見されるため、「舎衛城の神変物語」に関してはインド所伝の文献ではなく、漢訳から重訳された蔵訳である『賢愚経』が主なソースとなっていることが分かった。なお、チベットにおいて仏伝全体を説く際に『賢愚経』が常に参照されるということではなく、それぞれの事績に応じて最も適した典拠を選び出していると考えられ、その中にはインド由来の文献も含まれている。チベットでは一つのテーマを持つ絵画セットであっても、典拠が様々な場合がありうる。それぞれの事績に最も適した典拠を選び、それらを統合して、一つの絵画セットを表現したと結論付けられる。

#### (2) チベットにおける『カルパラター』を典拠とする絵画作品について

##### ① 基礎的な資料の作成

『カルパラター』の翻訳、絵画の構成、絵画の現存作例について、主要な例についてリストにまとめた。タンカのセットについては欠けのない完全なセットで知りうる限りのセットについて、その種類を一覧にした。絵画セットの中の物語の配置図、章番号と絵画の対応表、チベット語とサンスクリット語のタイトル対応表、チベット語とサンスクリット語の固有名詞対応表についてもデータ化してあり、すべて書籍に所収されているので参照されたい。

##### ② 軸装絵画（タンカ）のセット（以下、タンカ・セット）の施主の解明

タンカ・セットの中央に配置される主尊タンカと、最後に配置される左端を占めるタンカについて描かれるモチーフを解明した。主尊タンカには中央に釈尊の坐像と仏弟子たちを表し、下部には本文献の登場人物が描かれている。釈尊の両側に表されるのは文献に携わった人物と文献の伝承に関わる祖師たちである。文献に携わった人物の名前は本文献の前書部の偈に言及されており、それを参照して本尊タンカに表したと考えられる。また文献の伝承に関わった人物については、チベットのタンカにおける通例に則って、最も根本的な師をタンカの中央頂上に配し、そこから下に広がるように相承を成すように描かれていることが分かった。

最後に配置されるタンカにおいては、施主であるボラネーの肖像が表されるタンカと、ほとけの姿や、出家僧の姿が表されるタンカがあり、これらの違いがタンカの施主と成立年代に関わることを解明した。チベットではプロトタイプとなったタンカを複製して新しいタンカを制作することが行われ、同じように見える作品が非常に多く、作成年代同定は困難を極める。『カルパラター』のタンカ・セットについては、プロトタイプかあるいはそれに近いボラネーの姿が描かれる絵画において、ボラネー自身の願意や、自らの理想像が顕著に表されていると考えられる。これらを根拠に成立年代を推定すると、裏書にある年代にまさに一致しており、年代不明なタンカ・セットについても根拠を示して推定することができた。プロトタイプとなった主要な『カル

パラター』のタンカ・セットはおおむね、1730年代から80年代ごろに集中して描かれたことが明らかとなった。

③『カルパラター』のタンカ・セットにおける場面同定



インド・デリーのチベットハウス所蔵のタンカの、第 28 (29) 章から、第 39 (40) 章までに相当するタンカ三幅について文献の記述と突合して同定した。  
一例を左と下に掲載する。

チベットハウス・ニューデリー所蔵『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』軸装絵画 31 福からなるセットのうち、「右第 11」

(画中の白線と数字 (章番号) は筆者による編集)



上の全体像のうち、第 33 章に相当する「ナンダ・ウパナンダ竜王の物語」について場面同定を示す図 (画中の数字は筆者による編集)

①から⑤の場面を文献との突合により同定し、銘文を示し解説した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 引田弘道、大羽恵美	4. 巻 35
2. 論文標題 シュローナコーティヴィンシャ物語--『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』--第27章和訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 119-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 引田弘道、大羽恵美	4. 巻 34
2. 論文標題 酔象ダナバラ調伏物語--『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』--第28章和訳	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 111-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大羽恵美	4. 巻 376
2. 論文標題 チベットにおける舎衛城の神変における図像学的考察 賢愚経を所依とする絵画を中心にして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 密教図像	6. 最初と最後の頁 66-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 引田弘道、大羽恵美	4. 巻 33
2. 論文標題 カーシスンダラ物語--『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』--第29章和訳	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 93-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 引田弘道、大羽恵美	4. 巻 42
2. 論文標題 黄金の鹿物語 『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第30章和訳	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知学院大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 129-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大羽恵美
2. 発表標題 亀の捨身譚 KacchapavadanaとSuvaanakacchapajataka
3. 学会等名 シンポジウム インド文化の東南アジアへの伝播
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 大羽 恵美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 296
3. 書名 チベットにおける仏教説話図の研究	

1. 著者名 引田弘道・大羽恵美・山崎一穂	4. 発行年 2022年
2. 出版社 あるむ	5. 総ページ数 225
3. 書名 菩薩伝の如意の華鬘：ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター第27章 38章和訳	

1. 著者名 責任編集 立川武蔵・森雅秀	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 656
3. 書名 アジア仏教美術論集 南アジアII ポスト・グプタ朝～パーラ朝	

1. 著者名 長野泰彦・森雅秀 編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 400
3. 書名 チベットの宗教図像と信仰の世界	

1. 著者名 森 雅秀編 大羽恵美(分担)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論美術	5. 総ページ数 565
3. 書名 中央アジア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------